

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4098800032
法人名	医療法人 けやき会 東病院
事業所名	グループホームけやき
所在地	福岡県 築上郡 吉富町 大字 広津 603-2
自己評価作成日	令和4年 1月24日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 アーバン・マトリクス 福祉評価センター		
所在地	福岡県北九州市戸畑区境川一丁目7番6号		
訪問調査日	令和4年3月12日	評価結果確定日	令和4年3月30日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

医療法人けやき会東病院は京築地区唯一の一般病院であり、介護施設や急性期病院と密に連携し、亜急性期から終末期まであらゆる患者様を受け入れています。法人の所在地である吉富町は高齢化が進んでおり、地域の人々が安心し医療・看護・介護が受けることができるようにという、方針のもとグループホームけやき・小規模多機能ホームけやきを平成23年度に開設しました。家庭の環境の中で、家族と自宅で過ごしているような雰囲気与生活を過ごすことができます。コロナ禍により、外出行事や面会など制限下にありますが、事業所内で楽しめる行事の企画や感染対策に配慮した面会等を実施し離床者様の精神面を支えるケアに取り組んでいます。また、急変時や終末期も隣接する同法人の病院との連携がスムーズに行えることが強みであります。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

グループホームけやきは、高台にある木造2階建て1ユニットの事業所である。階下には小規模多機能ホームを有する。母体医療法人は在宅医療、終末期医療と地域に根差した運営を精力的に展開しており、高齢化が進む地域の中では不可欠の存在である。近隣には 同法人が運営する病院や複数の医療・福祉事業所があり、職員は平素から各種委員会活動や研修会等を通して、密接な連携を図っている。重度化や終末期に向けた支援の在り方等、当事業所に求められるのは、非常に困難なニーズである。この厳しい現実を職員は真摯に受け止め、蓄積されたスキルやノウハウ、培われたネットワークを駆使して、入居者一人ひとりの想いと誠実に日々向き合っている。その取り組みは、家族との連携を始め、地域との交流や社会資源の活用、馴染みの人・場との関係継続支援、その人らしい暮らしの実現、職員の特技を活かしたサービス内容等、随所に確認出来る。コロナ禍、我が身を顧みず、利用者一人ひとりの安心と安全を確保する為に、身を粉にして働く職員の姿、そしてそれを全面的にバックアップする事業所、法人の姿勢に感銘を受ける。これも偏に、これまで数多くの看取りを経験する中で、職員が介護・支援の在り方や仕事の本質を学んできた証に他ならない。ここに、日々終末期と向き合いながら、一人ひとりの命に寄り添ってきた職員の謙虚な姿と誠実さを感じずにはいられない。グループホームけやきは、そんな職員の確かな歩みに支えられ、地域の中で成長し続ける地域になくはならない確かな存在感をもった事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果					
自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業計画に法人理念を掲げ、それに基づき事業所の年間目標を作成し、事業所理念を中心にしたサービスを提供し、年度末に評価して次年度に繋げている。	法人理念「共生」を踏まえ、開設時より事業所独自の理念「咲顔・笑顔・縁顔」を作り上げている。毎年、理念に基づき年間目標を作成し、事業計画に掲げることで、職員間の共有と実践に努めている。様々な活動、実践記録から、職員間で周知が図られていることがうかがえる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域主催の行事など(祭り・どんど焼きなど)に参加している。地域のコミュニティーセンターでのイベントにも参加を積極的に参加している。民生委員さんと利用者情報を一部共有し、面会などにきてもらえることも増えてきた。(現在コロナ禍にあり活動自粛中)	地域の福祉学習会に講師として参加する等、感染対策に苦慮しながらも地域貢献に努めている。コロナ禍以前は、地域の祭りや伝統行事、イベントに積極的に参加したり、認知症サロンに専門職として参加する等、積極的に地域とのつきあいを行っていた。また自治会長や民生委員、交番警官とも連携を図る取り組みがなされている。	
3		○事業所の方を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所所在地のサロンに専門職として参加し、認知症や高齢者支援について一緒に学んでいる。(現在コロナ禍にあり活動自粛中) 7月に吉富町ささえ愛たいの活動の中で、福祉の学習会の講師を務めるなどし、地域に発信できるように取り組んでいる。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	定期会開催の会議の中で、利用者の現況報告や事業所の活動内容を報告している。併設している小規模多機能ホームの外部評価を本会の委員と取り組んでおり、活用できる部分についてはグループホームのサービス向上にも活用している。	年6回定期開催。内4回は書面会議。参加者は、家族、自治会長、民生委員、町担当者、地域包括支援センター職員、警察官等、多様な構成。運営状況の報告等を行っている。コロナ禍で苦慮しながらも、工夫を凝らし2回の対面開催を実現。関係者全員に議事録を送付している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村担当者・地域包括支援センター職員と定期の運営推進会議で意見交換を行っている。また随時報告・連絡・相談をおこない協力関係を築いている。	運営推進会議だけでなく、平素から連絡や情報提供、相談等を行っており、「顔の見える」良好な関係が築かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止委員会を設置し年に4回委員会を開催し、事業所内の点検等を行っている。また、年1回委員会が中心となり身体拘束に関する勉強会を行い、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	職員は、委員会活動や研修、指針を通して、禁止の対象となる具体的な行為について学び、正しく理解している。委員会は、3ヶ月に1回以上開催し、職員間での周知を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束廃止委員会の中で、虐待に関する内容に関しても管理していき、年に1回委員が中心となり、虐待の種類やその内容、福祉施設従事者の義務等について勉強会を開催し、虐待防止に努めている。		
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在成年後見制度を利用している方はいないが、資料又はパンフレットなどを用意し、対応できる準備はできている。	職員は、研修や勉強会を通して、制度の意義や必要性について理解している。平素から司法書士や地域包括支援センターと連携し、情報交換や相談に応じる等、制度の活用にも備えている。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用契約書に基づき、利用料金をはじめ疑問点を聞き出しながら、時間をかけて説明して同意を得ている。施設玄関にいつでも契約書内容を閲覧できるようにしている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご意見箱や苦情受付窓口の設置により、利用者またはご家族の意見が反映できるように取り組んでいる。家族会を組織し、意見交換もしている。また、運営推進会議に家族代表にも参加していただいている。	年1回開催の家族会や、家族代表が参加する運営推進会議等、入居者・家族の意見を運営に反映する仕組みがある。その際、いずれも丁寧な資料作成がなされ、情報提供に努めていることがうかがえる。現在、コロナ禍で面会もままならないが、以前は面会時のコミュニケーションを大切に、意見や要望の収集に努めていた。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1度の会議にて管理者と職員参加の会議を行い意見交換を行っている。施設内に各種委員会を設置しており、各委員の職員が積極的に管理者に要望を提案できる環境にある。	毎月の会議や各種委員会活動を通して、職員は意見や提案を述べる機会を得ている。人事考課を導入し、複数回の面談とフィードバックが実施されている。これらの機会を通して、代表者・管理者は、職員の意見や提案の収集を行い、運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	託児所が整備されており、小さな子供がいる職員も安心して働ける環境を作っている。希望の休みなども積極的にとれるように体制を整えている。非常勤職員の勤務時間についても柔軟に対応している。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員募集や採用については、性別、年齢などを採用対象にはしていない。	職員の採用にあたっては、性別や年齢等を理由に採用対象から排除することはない。実際に幅広い年齢層の職員が働いている。マッサージやアロマ等、職員が特技を業務に活かせる機会も設けられている。母体が医療法人であることから、医療面の福利厚生も充実している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	職員としての心構え(資料)や言葉遣い適正に関する方針の中で個人の尊厳や人としての権利などについて、職員などに周知を図っている。	倫理規定や研修計画に人権に関する内容を盛り込み、人権教育、啓発活動に取り組んでいる。実際、身体拘束廃止や虐待防止、個人情報・プライバシー保護、ハラスメント防止等の研修実績も確認出来る。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年間研修計画、新人職員育成計画などをもとに研修の確保や働きながら職員を育てる環境を整え取り組んでいる。(コロナ禍にあり外部研修は自粛傾向) 施設内研修が充実できるように計画をたてる、ZOOMでの研修参加を充実させる等配慮している。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	当事業者と他近隣の3同業者スタッフと3ヶ月に1回を目安に連絡会議を開催し、意見交換をおこないサービスの質向上に努めている。(コロナ禍にあり連絡会議自粛中)		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス導入前の本人との面談を必ず行い、本人が必要としていることが何なのかを適正にアセスメントできるように取り組んでいる。また開始前の事業所内見学を積極的にすすめている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス導入前の家族との面談を必ず行い、家族が困っている内容と本人の望んでいることなどを正しく理解し、納得していただけるように要望などを整理している。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族が共に納得できるサービスが提供できるように、当事業所利用以外の選択肢を用意し、複数のサービスの中から本人家族の自己決定により、安心してサービスが、迅速に行われるように努めている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者と職員とで一緒におやつを作ったり、洗濯をしたり、食事を一緒に食べたりすることにより、利用者が一方的に介護される側にならないように取り組んでいる。その中で、生活を共にする家族のような雰囲気を作れるように努めている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	運営推進会議への家族の参加依頼や、利用者の訴えや要望に応じて面会を依頼する、電話を取り次ぐなどし関係作りを仲介している。また、家族に1～2カ月に1度状況報告書(写真あり)を届け、関係作りに努めている。		
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの場所に外出支援をしたり、地域の行事に参加することなどにより関係が途切れないように努めている。(コロナ禍にあり困難)	現在、コロナ禍で実施困難ではあるが、コロナ前は、定期的な帰宅や慣れ親しんだ地域行事への参加、行きつけの美容院利用、以前所属していた会主催のコンサート参加等、馴染みの人や場との関係継続に努めていた。また本視点を計画書にも位置づけており、計画的に取り組んでいることがうかがえる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者個人の時間を大切にすると共に、みんなで一緒に過ごせる場面や時間を作れるようにしている。また人間関係がこじれないように職員が利用者同士の人間関係の状況を共有し理解できるように取り組んでいる。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の事業所に移行する場合には、次の事業所にこれまでの支援状況を報告するなどしている。また死亡終了したご家族とも継続して事業所に遊びに来ていただけるような環境を整えている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ケアプラン作成時の意思確認や、日々の関わりの中から希望や意向を見出し、それを記録し管理者・計画作成担当者に報告し情報を共有することを心がけている。希望や意向の把握が困難な場合は家族等からの情報収集も積極的に行っている。	アセスメント時に思いや意向の確認を行うとともに、日頃からのコミュニケーションの中で、何気ない会話や行動から、一人ひとりの思いの把握を行い、潜在化するニーズの掘り起こしに努めている。困難な場合にも、家族の協力や関係者からの情報提供を得ながら、本人本位の支援に取り組んでいる。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	個人情報の保護(プライバシー)の問題に細心の注意を払い、介護・看護する上で必要最低限度の生活歴や生活環境の情報収集を行っている。入居前の介護支援専門員、福祉施設・医療機関からの情報収集は徹底している。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	介護度・認知症自立度・ADL・個々の過ごし方の違いを十分理解したうえで、介護・看護を提供し、事業所の時間で縛ることなく、個々のペースで生活できる環境を整えている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人と家族の要望を踏まえた上でケアプランを作成している。サービス担当者会議に家族が出席できない場合にも事前に意見を聞くなど取り組んでいる。、医療面のケアについての留意点などが円滑に収集できる。	本人、及び家族へのアセスメント、関係者等からの情報提供を踏まえ、職員間の話し合いにより計画を作成している。定期的なモニタリングや会議を実施し、本人を始め、関係者の思いや意見を反映させ、現状に即した本人本位の計画となるよう努めている。	
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録や申し送り簿などを活用し、利用者の状態の変化などの状況を職員間で共有できるように取り組んでいる。ICTを活用した記録おこなうことで情報共有を円滑化できるように取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ禍にあり感染リスクの高まる、外出行事や外泊などのニーズに関しては応えきれていないと感じるが、事業所内で楽しみたい！おいしいものが食べたい！等のサービス提供は叶うように柔軟に対応している。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	概ねの日常生活は事業所内で完結することはできるが、地域の社会資源等について地域包括支援センターから情報をえるなどし、把握に努めている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用の際に主治医の変更を強要することはないが、同法人の医療機関をかかりつけ医とすることにより、緊急時の不安や情報共有の円滑さが強化されることにより本人御家族の不安が解消できるように取り組んでいる。	母体は隣接する医療法人であるが、本人及び家族の希望を大切にしている。本人・家族が選択したかかりつけ医とは、日頃から良好な関係が築かれている。看護師資格を有する職員が多く配置されていることから、連携もより専門的で、安心して適切な医療を受けられる環境であることが確認出来る。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置しており、それに加え管理者も看護師資格を保有しており、常時看護師と介護職員とで相談できる環境にある。月に4～5回は契約している訪問看護事業所スタッフに健康チェックしていただいている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院先が同法人の併設病院であれば、365日24時間病院関係者と情報交換や相談ができる環境にある。また利用者入院中は職員が可能な限り面会に行くように心がけている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合の対応に係る指針に基づき、本人・家族・主治医・管理者を中心としてターミナル期を当事業所で迎えることができる環境を整備している。また、本人・ご家族の要望であれば同法人併設病院でターミナル期を迎えることもできることを説明している。	指針に基づき、本人・家族等と話し合いを行い、方針を共有しながら、一人ひとりの想いに寄り添った支援に取り組んでいる。一連の説明資料も充実しており、豊富な実績を垣間見ることが出来る。実際に医療ニーズの高い方を積極的に受け入れており、多くの看取り実績もある。経験豊富な職員や看護師資格を有する職員も多く、医療機関との質の高い連携が図られている。	
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時・事故発生時対応マニュアルを整備し、対応が出来るようにしている。また、急変時や事故発生時併設病院に緊急受診できる体制が整っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人主体の消防訓練の参加、事業所内の消防訓練を実施し、備えている。また各災害ごとにマニュアルを整備している。町主催の防災訓練にも参加し、協力体制を築けてきている。	年2回、消防署の協力を得ながら、火災・地震・夜間を想定した訓練を実施している。自治会長や民生委員の本訓練参加や、町の防災訓練参加等、積極的に地域との連携を図っている。防災委員会の活動やマニュアルの充実を通して、日頃から非常時に備えていることがうかがえる。事業継続計画(BCP)についても研修等を通して、積極的に取り組んでいる。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員の利用者に対する言葉遣いについて重要視しており、尊厳を傷つけないように、言葉遣いに関する方針を作成している。	言葉遣いや羞恥心への配慮、好みや習慣、自己決定の尊重等、一人ひとりのニーズに柔軟に対応出来るよう努めている。プライバシーについては、研修計画に位置づけたり、各委員会活動を通して、職員間に周知を図る取り組みがなされている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員の毎日の業務が、利用者の自己決定の妨げになっていないかなどを月1度の会議で話し合っている。また、日常会話の中から聞かれる利用者の希望を把握できるようにしている。認知症のため意思疎通困難な方は生活史などを参考にしている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	集団での生活も大切にしているが、したくないレクリエーション活動や入りたくない日の入浴など一人ひとりの方の気持ちやペースを大切に支援している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	散髪ボランティアによる散髪もできるが、馴染みの美容室への散髪も支援できるようにしている。新しい私服の買い物などの要望にも対応している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	朝食・昼食・夕食は基本的には職員が準備・調理・片づけをしているが、おやつ作りを利用者中心に行えるように取り組んでいる。	委託業者からの食事に、旬の食材を加える等、独自の工夫を行っている。入居者の好みの反映や楽しみ、担い手としてのかかわりの観点から、おやつ実習や昼食会を企画・実施している。その際、各自が出来る範囲での役割を担っている。	
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	委託業者により栄養バランスは管理されている。栄養士によりバランスなどをさらに確認して提供している。スプーン・コップなど利用者の能力にあわせて使用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを実施している。必要に応じて職員による磨きの仕上げを行い口腔内の清潔保持につとめている。希望者には歯科の往診を実施し、口腔ケアに取り組んでいる。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	職員が利用者それぞれの排尿間隔や排便間隔などを把握できるように取り組み夜勤オムツを使用する方でも日中はトイレでの排泄を試みるなど自立に向けた支援を行っている。	職員は、一人ひとりの状態、排泄パターン、習慣を把握しており、トイレ誘導を基本に、見守りや適時言葉かけを行う等、柔軟に対応している。「計画書」にも個別のニーズに応じた内容が記載されており、排泄の自立に向けた支援に取り組んでいることがうかがえる。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	利用者の排便間隔を職員が把握し、乳製品や運動により腸の活性化を促すなどし便秘の改善に取り組んでいる。状況に応じ主治医に相談し薬の服用などにより排便をできるように取り組んでいる。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的な入浴予定日(夏3/週・冬2/週)はあるが、入浴予定日以外の希望入浴や入浴できない方の清拭などは臨機応変に対応している。	基本的に夏は週3回、冬は週2回入浴を実施している。1日3人と、ゆっくり入浴出来るよう配慮がなされ、一人ひとりの状態や、希望の時間帯等のニーズに応じ、柔軟に対応している。入浴剤やアロマオイル、マッサージ等を施し、入浴時間がくつろげ、楽しめるよう支援している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間に目を覚まし落ち着きがない方などに、職員と一緒に茶を飲んで過ごしたりと個別に対応している。また、自分の好みの布団や毛布を持ち込んでもらうことなどにより、安眠できるように支援している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者の服用している処方箋をスタッフ全員が閲覧できるようにしている。また薬の準備は看護師が行うようになっている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	コロナ禍にあり、喜びや楽しみが制限される中でもできることを考え、『おやつ作り』の充実や、外に出れなくても季節感のある写真を撮り思い出を残そうと事業所をあげて取り組むことができた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍にあり、思うような外出支援はできないが、気候をみながら施設外周やテラスでの日光浴を取り入れるなど活動している。	コロナ禍で自粛を余儀なくされているが、近隣の公園までの散歩や日光浴、花見のドライブ等、感染対策を講じながら、可能な限りの日常的な外出支援に努めている。コロナ禍前は、季節のドライブや外出に出掛けたり、家族と連携を図りながら、週末の帰省やコンサート等の催し参加等、個人の要望に応じた柔軟な外出支援に取り組んでいた。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分で金銭管理をおこなうことの意味を理解した上で、ご家族と相談しながら金銭管理の支援に取り組んでいる。事業所で金銭管理をしている方でも、買い物した時には自分でお金を支払うなどの工夫をしている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の使用や取次ぎが自由にスムーズに行えるように支援しています。携帯電話の使用も行えるように事業所として取り組んでいます。利用者の希望に応じて手紙の代筆や代読を行っています。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	タンス・床頭台・テレビ・エアコン・ベッドなどの備品が各居室に整っており、利用開始が円滑にできます。加湿器なども準備しています。また馴染みの家具などの持ち込みもできます。	共用空間は採光良く明るい。コロナ禍前は、小上がりの畳スペースや書棚が配され、生活感を取り入れた雰囲気作りがなされていた。現在は、感染症対策として、横並びにテーブルを再配置し、十分な空間確保と衛生保持に努めている。空気清浄機や手指消毒液も確認出来る。タペストリー等、季節の飾りも施され、暮らしに彩を与えている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールなどで、自分のペースで過ごすことも出来るようにしています。また、和室を用意しておりそこで足を伸ばして休憩できるようになっています。また、同建物の1Fの小規模ホーム利用者と談笑などして過ごすこともできます。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたものや思い入れのある品などがある環境で生活することの重要性を理解した上で、本人・家族と相談しています。思い出の写真などを飾るなど工夫しています。	重度化した利用者一人ひとりに対応すべく介護用ベッドや床頭台、タンス等が完備されている。本人・家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもの(家具、陶芸品、自作の作品、家族写真等)を持ち込んでもらい、本人が快適に過ごせるよう本人本位の空間作りに努めている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すりの設置・エレベーターの設置・入浴リフトなど工夫をすることにより、できることが継続してできるように、できなかったことができるようになるよう取り組んでいる。		